

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12234

研究課題名（和文）新派映画の音--弁士の語りと日本の口承芸能について

研究課題名（英文）The sound of Shinpa films--About benshi's narration and Japanese oral entertainment

研究代表者

谷口 紀枝（Taniguchi, Norie）

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・その他（招聘研究員）

研究者番号：70782697

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、新派映画を、聴覚、視覚の両面から検証することで、その全容を実証的に解明することにあった。本研究においては、家父長制度に翻弄される近代女性の悲劇を描いた新派映画と、近代日本に生きる女性の心情を代弁した弁士の語りに着目して検証を進めてきた。結果、明らかになったのは、新派映画を語る弁士の大部分は男性で占められ、近代を生きた女性の肉声は、伝統的な芸能の延長線上にとどまり、近代劇である新派と結びついた事例は希少であるということであった。今後は、この研究成果を軸に、近代日本女性の表象とその肉声の存在の実態についての検証を継続する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、新派映画を、映画に関連する同時代の文学、演劇、芸能などの周辺領域を包括してジャンル横断的に考察することで、残存率がおよそ3%と低く、これまで研究対象とされなかった新派映画を、聴覚、視覚の両面から体系的に明らかにしてきたことにあり、その社会的意義は、これまで殆ど検証されることのなかった明治、大正期における近代女性の肉声の不在に着目した点にある。伝統芸能の中に僅かに残存した近代女性の真の肉声は、大正期のレコード文化の発達を背景に、ようやく日本中に響くことになったのである。

研究成果の概要（英文）：The present research aims to elucidate the whole picture of a Japanese modern drama called Shinpa film, a genre which depicted the lives of women trapped by the patriarchal ideology emergent in modern Japanese society. This study examines empirical materials from an audio-visual perspective, with a particular focus on how Benshi narrated the story on behalf of these women. The results show that, even though the Shinpa genre primarily represented the lives of women living in modern Japan, their actual voices were absent and rarely associated with Shinpa films at that time. This absence is attributed to the fact that most Benshi narrators for this genre were male. For further research, I would extend upon this outcome by investigating the representation in relation to the real voices of women in modern Japan society.

研究分野：日本映画史

キーワード：新派映画 弁士 女性の声

## 1. 研究開始当初の背景

- (1) 日本においては、大正元年（1912年）に明治期の主要な4映画会社が合併して日活が発足して以降10年以上に渡って「新派」（現代劇）と「旧劇」（時代劇）という二つの種類の映画が主に製作され続け、活動弁士という映画専門の職業的解説者が人気を博した。日本映画は、弁士による言語的な口承解説が、主要な視覚的芸術要素である映像を凌駕するという世界に類を見ない独自の発達をしてきたが、これら初期映画に付随する音は、新派と旧劇でも異なった様相を見せていた。旧劇においては、初期段階から歌舞伎、人形浄瑠璃に倣って義太夫節が用いられ、複数の弁士による影台詞により物語が進行したのに比し、新派では、弁士が単独で解説するという形態が優先されたのである。
- (2) このように初期の日本映画には、様々な「音」が付随していたが、研究当初、初期映画研究、音響研究ともに十分な先行研究があるとは言い難い状況にあった。殊に新派映画に関しては、フィルムの残存率が極めて低く、その実態を把握するのは困難であることから、また、弁士による解説も多分に大衆的であるという認識から、研究の俎上に上がることのないまま近年にいたった。新派映画が研究の対象となったきっかけは、2000年以降に早稲田大学演劇博物館で発掘された新派映画の断片が、共同研究（2009-2014）を通してデジタル化されたことであろう。この発掘により未知の領域とされた1910年代の新派映画が可視化され、その一端を検証することが可能となったのである。
- (3) 本研究の着想は、昭和2年（1927年）に発売されたSP盤レコード『椿姫』を聴く機会を得たことをきっかけとする。森岩雄が脚色し、村田實により監督された『椿姫』（1927年）は、それまでの新派的な傾向から脱却した近代的な『椿姫』として発表されたが、レコードに所収された音声は、現代的とされた映像とは乖離した日本の伝統芸能の系譜に位置する純日本的な響きを持っていた。それは、日本映画の視覚的要素である映像が欧米的な方向に進化していた一方で、付随した聴覚的要素である音声は、前近代的で純日本風の諧調を持つものであったということを示しており、日本映画における映像と付随する音声の発達が、全く異なったレベルで行なわれていたことを意味していると考えられた。本研究は、日本独自に発達した新派映画の「音」の実態を検証し、それが活動弁士を通じて日本全国に流通することで、日本の大衆、殊に女性に与えた影響を解明することを目的として開始した。

## 2. 研究の目的

- (1) 本研究の目的は、映画誕生以降、現代劇として製作された新派映画に付随した音の歴史を、弁士台本を中心とする文字資料と、大正から昭和初期にかけ流通したSPレコード盤に収録された弁士の語りを含む音資料の双方から検証し、現在進行中の映像の解析と合わせ、新派映画を聴覚、視覚の両面から検証することで、その全容を実証的に解明しようという試みに始まった。
- (2) 本研究においては、家父長制度に翻弄される近代女性の悲劇を描いた新派映画と、近代日本に生きる女性の心情を代弁した弁士の語りや、各地の上映館における興業や、レコードなどの音媒体を通して日本の津々浦々にまで運ばれることで、近代日本女性の一端を形成する過程に関与したと仮定し、検証を進めてきた。
- (3) 新派映画においては、女性を主人公としながらも、女性役は女形という男性俳優により演じられ、上映の際には、男性弁士の声か添えられた、というのが一般的な認識であるが、そこに新派映画の解説をする女性弁士は皆無だったのか、そうであれば、映画草創期から初期時代における映画上映劇場に真の女性の肉声は不在であったのか、との問題提起のもとに、各種資料を渉猟する作業を試みていった。

## 3. 研究の方法

- (1) 活字媒体：弁士台本、映画演芸雑誌、新聞媒体における弁士に関する記事の収集  
→・実際に弁士が発した文言を拾い集める作業を以下の機関を中心に実施  
（東京）早稲田大学演劇博物館、国立映画アーカイブ、松竹大谷図書館  
（関西圏）京都府京都文化博物館、国際日本文化研究センター、神戸映画資料館
- (2) 「音」媒体：現存する音響資料の解析  
→・音響資料として、早稲田大学小松弘教授の個人コレクションである未公開の

新派映画を素材としたSP盤レコード（研究資源として使用することは許諾済）のデジタル化とその検証

→・日本の口承芸能に関するその他の領域、琵琶演奏、落語、講談、浪花節から新たな音響資料の発掘

(3) 映像の解析：スクリーンに映し出された映像の検証の継続

→・残存する希少な資料から消滅した映画の場面とされる画像を収集し、この画像にSPレコードで語られた「音」を重ね合わせることで、同時代における新派映画上映空間の再現と観客の受容形態についての検証を実施

4. 研究成果

- (1) 研究素材としてデジタル化したSPレコード資料を使用して、「新派的な音色」の行方—松竹現代劇映画とSP盤映画説明レコード『二人静』（1935）の検証を通して」と題する研究発表を日本映像学会、第44回全国大会（東京工芸大学、2018.5）で行い、後日同タイトルの研究報告論文を発表した。この検証で明らかになったのは、女優を主人公とし、汽船のエンジン音、アコーディオンの音色、喫茶店でのレコード音など、同時代の輸入文化を取り入れた松竹らしい明朗で都会的な作品『二人静』が製作された昭和10年（1935年）に発売された静田錦波による純日本的な階調による映画説明レコードが、映画の公開後も引き続き受容されていた背景には映画における音響と大衆の音感覚の発達の時差があり、それが歩をともしたものではなかったということであった。本論では、日本においては、映画が技術的に進歩しようと、外国から夥しい数の洋画、洋楽が輸入されようと感化されない日本人旧来の音感覚への趣向があり、映画における女優の声と、レコード化された男性弁士の声が、融合する形で作品が受容されていたと結論した。（『日本大学芸術学部 日本大学研究員 研究報告書 第18回』日本大学芸術学部、2019.8）また翌年には、「新派映画の音—弁士の音源一考察」と題する研究報告論文も発表した。（『日本大学芸術学部 日本大学研究員 研究報告書 第19回』日本大学芸術学部、2020.8）



図1、2、3：発表資料：「新派的な音色」の行方—松竹現代劇映画とSP盤映画説明レコード『二人静』（1935）の検証を通して」

- (2) 本研究は、挑戦的研究（萌芽）「新派映画と「新派的なるもの」の系譜学」（2018-2020）と連動して活動してきたが、両研究の一番の成果は、旧劇とともに日本の映画初期時代を代表する類型でありつつも、残存するフィルムが希少であること、歌舞伎から引継がれた女形を採用していた点で映画の固有性である写実、リアリティに反すると批判の対象となってきたこと、また、弁士による解説も多分に通俗的であることから、学問として議論の俎上に上がることはなかった新派映画に脚光を当て、映画のみならず、原作として提供された文学、映画の模範となった演劇へと研究領域を広げ、ジャンルを横断する議論が展開されたことにある。この共同研究の活動は、国際学会において、「The Genealogy of Shinpa Film from the Early Era to after the War」と題したパネルを組み、文学、演劇と新派映画との連関、観客の新派映画受容などについて議論したことに開始された。（Asian Studies Conference Japan ICU2018、国際基督教大学、2018.7）

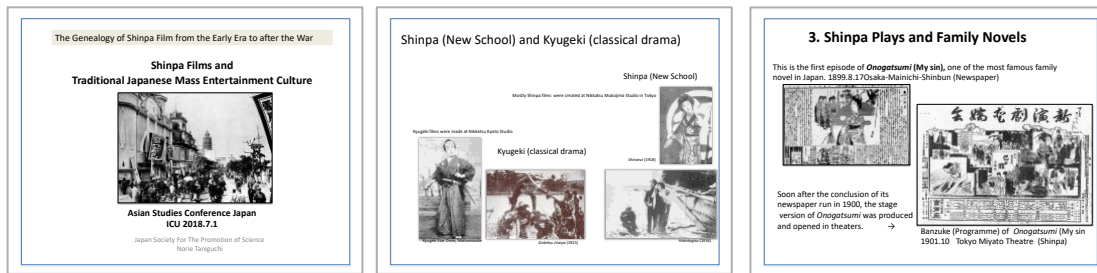


図 4、5、6：発表資料“Shinpa Films and Traditional Japanese Mass Entertainment Culture”

- (3) この共同研究は、期間終了後も継続され、書籍の刊行に向けての研究会が発足した。まずは、研究誌『映画学』において、新派映画の特集を組み、研究者3名で論文を提出した。「新派映画の音一初期時代の映画常設館における女性の声について」(谷口)、「新派映画再考—その受容、生成、伝搬」、「新派映画にみる義理と情の葛藤構造—『瀧の白糸』と『椿姫』のヒロインたち」(『映画学 第34号』、早稲田大学映画学研究会、2021.3)その後、文学、演劇の領域から新たな研究者を迎え、原稿検討会を経て(早稲田大学、2022.3)、共著書『新派映画の系譜学—クロスメディアとしての〈新派〉』(森話社、2023.3)が刊行された。本書においては、新派的な感性の広がりに着目し、文学、演劇、映画とジャンルを横断した論文が展開されているが、一貫しているのは、小説、舞台、映像と異なる表現媒体でありながら〈新派〉と呼ばれた作品がいかにか、大衆の感傷性を刺激し、読者、観客の共感を生み、深い情感を生成してきたか、という受容者の心性、身体性に関わるテーマであった。また、本書には「新派映画一覧」も掲載されているが、この製作過程において今後に関わる課題を見出したのは有意義な発見であった。




- (4) 本研究においては、明治期に発行された雑誌『新小説』、『演芸画報』、日本最古の映画雑誌『活動写真界』、大正2年創刊の『フィルム・レコード』(後に『キネマ・レコード』に改名)、追って発行された『活動写真雑誌』、『活動之世界』などの映画専門雑誌を読み込み、「女性の声」に留意して、「葉書便り」のような観客の受容に関する言説資料を渉猟してきた。結果、明らかになったのは、女性の弁士に関する情報は、映画草創期に散見された程度で、次第に男性弁士の話題で占められるにいたること、つまり、新派映画を語る弁士の大部分は男性であり、女性弁士の活躍の場は、女役者の声色などが適応された旧劇映画に留まっていたことである。男性弁士は、観客の需要に応えるように、近代的というよりは、純日本的な階調による説明を好み解説した。そして、女性の真の肉声は、女義太夫、女大夫、瞽女唄など、伝統的な芸能の延長線上にとどまり、近代劇である新派と結びついた事例は希少だったのである。
- (5) これらの検証の成果の一端として、東京大学駒場キャンパスで開催された表象文化論学会第17回大会においては、「新派と新劇の交差——『復活』と『カチューシャ』を繋ぐ女性の「声」について」と題する研究発表を行った。本発表では、その発生以降一定の距離を保って活動していた新劇と新派が交差した舞台劇『復活』(1914)と映画『カチューシャ(復活)』(1914)を取り上げ、自由恋愛に身を投じた松井須磨子演じるヒロインに〈新しい女〉を感じ、共鳴する人々が、女形俳優・立花貞二郎主演の『カチューシャ』をも取り込みつつ受容していく過程を考察した。
- (6) 新劇と新派が偶然に、あるいは必然的に接点を持ったことにより生まれた「カチューシャ」の大ヒットがもたらしたものは、女優松井須磨子の身体により演じられた〈新しい女性像〉＝〈自然体の女性〉が、初めて新派作品において演じられてきた〈近代女性〉＝〈家父長制度に翻弄され悲劇へと向かう女性〉＝〈映画においては女形俳優により演じられ、劇場においては男性弁士により説明されてきた女性主人公〉と重なり合った瞬間ではなかろうかとも思われる。日本の大衆、特に女性は、この時初めて、「松井須磨子という女性の身体とその生の声を通して」その内なる声が日本の津々浦々まで運ばれたことを実感したのであらうと考えられるのである。

明治、大正、昭和期の女性の表象と肉声に関する研究は今後も継続していく予定である

**芸術座公演『復活』**

★大正3年3月【演劇】帝國劇場 芸術座『復活』カチューシャ:松井須磨子  
レフリードフ:横川チホ子武田 中村吉義作

9月【書籍】新潮社『脚本復活』島村抱月編  
5月【レコード】『復活』唱歌 セリフ 松井須磨子  
9月【演劇】東京座『復活』 島村抱月編  
8月【映画】日本キネト 本編『カチューシャの唄』脚色: 島村抱月  
主演: 松井須磨子 浅草日本座(キネト 本編) 松井須磨子



大正3年(1914)5月

【芸術座の】「観客のあこがれは『心臓が止まるほど』の興奮と化し、いつも大入りとなる。松井須磨子が日本のスターになったのは、ひとえにレコードの方だといっても過言ではなからう。ここにおいて私たちは、レコードの新しい効用を知った。一つはスターが生まれるということ。もう一つは流行歌ができるということ。」である。(倉田喜弘『日本レコード 文化史』98頁。)

**芸術座 凱旋公演『復活』**

大正3年(1914) 9月19日~9月27日 東京・東京座(復活、チオゲネス)

「カチューシャ可愛や」の唄のあたり 観衆中の青年男女は思はず合唱する有様であった。」(『読売新聞』 1914年9月20日)

「芸術座の『復活』劇で天下に鳴り響いた『カチューシャ可愛や』の唄は殊に開演で幕間に須磨子が独唱しなるとかて観客では合唱する者もあつてゐる。中でも芝居の三役では大した流行で、休みの時間には、此所に三人役所に五人歌聲となつて演劇のとけぬ間を惜しんでゐる。」(『読売新聞』 1914年6月17日)

「開幕に至るまでの長時間の無礼を忍辱するために特に三光堂客種の善善種と天然色活動写真会社の客種の活動写真とを余興とし、翌て正六時に『復活劇』の除幕は観る者の聲と共に開けると観客は満座振るがんばかりの大喝采を以て迎えた。観客の心が次第に舞台に惹き付けられ行く頃、ノックの音を後にして妖艶なる須磨子のカチューシャが舞台に現はると驚かして居るネフリードフが忽ちカチューシャに抱かれた様に須磨子のチューシャに倒れ、観客は狂喜するばかりであった。須磨子のカチューシャが菅田氏のネフリードフとどつたりと呼吸が合致して入神の境に入ると幾平の観客の聲は舞台に響かされて、轟かせしなかつた。」(『読売新聞』 1914年9月25日)

図7、8: 発表資料「新派と新劇の交差——『復活』と『カチューシャ』を繋ぐ女性の「声」について」

**日活向島映画『カチューシャ』**

「カチューシャ」の前後を通じて殆んど顔縁と人種的气氛が現はれてゐない等は殊に私の目に印せられた。」(『キネマ・レコード』大正4年2月)

『カチューシャ(復活)』日活向島撮影所(1914) 浅草三友館白編  
監督: 船山喜代松 脚本: 榎本清 撮影: 高橋幸三郎  
出演: 立花貞二 関根達夫 小森保 池田一郎 大村正雄 五月塚

★『日活向島映画『カチューシャ』について』

「演出はこれまでの新派劇とあまり変わったことばなく、余所に洋装を試みた点など、今日から 観れば興味を得るものであるが、タイトルにカチューシャの唄の歌詞を入れたり、背景や動作に、洋劇としての珍しさがあつたり、興行に際して、スクリーン上で女の声色並に出るカチューシャ可愛やの流行唄の魅力があつたとして、全長三回〇〇尺の長時を、興味は充分に算じ、堪能したのだ。」(田中統一『日本映画発達史』208頁。)

「日活は専断の一端で復活を撮った。立花貞ちゃんのカチューシャに關連のネフリードフと来るからおそろしい、シネマ子の聡明なる眼を以て見ると芸術座の復活と日活の復活も先ず當た、第一顔縁はめっちゃだし、背景はいい加減だし、表情は無し泣きたくなる」(『キネマ・レコード』大正5年11月、32頁。)



まとめ

それまで敬えて距離を保っていた新劇が新派に接近し、『復活』という作品でこの二者が接点を持ったことで、松井須磨子自身の生き様が投影されたとも思われる女性主人公カチューシャは新派を愛する都市の有産者のみならず、道徳で暮らす人々の目にもとまり、それらの人々は松井の女性としての身体と声を通して、『カチューシャの唄』を聞き、(新しい女性)の存在を賞徳した。

映画『カチューシャ』は、街の映画館から、辺境の地の映画館まで流通し、『カチューシャの唄』は、社会の意匠で生きる人々にも歌い広げられた。女優松井須磨子の演じたカチューシャと女形修徳立花貞二の演じたカチューシャの長巻はおそろしく大きく相違していたであろう。しかし、そこには両者も愛敬を蒙りし『カチューシャの唄』があった。女性の声で歌われたであろうこの唄の中核は、新派と新劇の架け橋となり『復活』劇を、人々の目にも届けたのである。






図9、10: 発表資料「新派と新劇の交差——『復活』と『カチューシャ』を繋ぐ女性の「声」について」

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 谷口紀枝	4. 巻 第63号
2. 論文標題 書評：志村三代子・角尾宣信編『渋谷実 巨匠にして異端』（水声社、2020年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 演劇映像	6. 最初と最後の頁 124-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口紀枝	4. 巻 19
2. 論文標題 新派映画の音 - 弁士の音源一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部日本大学研究員研究報告書	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口紀枝	4. 巻 34
2. 論文標題 新派映画の音 初期時代の映画常設館における女性の声について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 映画学	6. 最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口紀枝	4. 巻 61
2. 論文標題 書評 岩本憲児、晏編『戦時下の映画 日本・東アジア・ドイツ』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 演劇映像	6. 最初と最後の頁 89-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口紀枝	4. 巻 18
2. 論文標題 新派的な音色の行方 松竹現代劇映画とSP盤映画説明レコード『二人静』（1935）の検証を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部日本大学研究員研究報告書	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口紀枝	4. 巻 61
2. 論文標題 書評 笹川慶子著『近代アジアの映画産業』（青弓社、2018年）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 演劇映像	6. 最初と最後の頁 65-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口紀枝	4. 巻 17
2. 論文標題 松竹蒲田作品『島の娘』（1933）と第36回パルデノーネ無声映画祭	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部日本大学研究員研究報告書	6. 最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 谷口紀枝
2. 発表標題 新聞連載小説『うき世』から映画『うき世』へ 鱈崎英朋の挿絵とその受容に関する一考察
3. 学会等名 日本近代文学会2023年度秋季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷口紀枝
2. 発表標題 新派と新劇の交差 『復活』と『カチューシャ』を繋ぐ女性の「声」について
3. 学会等名 表象文化論学会第17回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷口紀枝
2. 発表標題 新派映画の音 初期時代の映画常設館における女性の声について
3. 学会等名 片岡コレクション研究会第7回定期講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷口紀枝
2. 発表標題 松竹蒲田作品『島の娘』(1933)と第36回パルデノーネ無声映画祭
3. 学会等名 日本大学芸術学部ポスター展
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷口紀枝
2. 発表標題 「新派的な音色」の行方 松竹現代劇映画とSP盤映画説明レコード『二人静』(1935)の検証を通して
3. 学会等名 日本映像学会第44回大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 Norie Taniguchi
2. 発表標題 How Newspaper Novels and Their Illustrations Shaped Japanese Films
3. 学会等名 15th International Donitor Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Norie Taniguchi
2. 発表標題 Shinpa Films and Traditional Japanese Mass Entertainment Culture
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 上田学、小川佐和子、谷口紀枝他10名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 464
3. 書名 新派映画の系譜学 クロスメディアとしての 新派	

1. 著者名 Edited by Joanne Bernardi, Paolo Cherchi Usai, Tami Williams, Joshua Yumibe	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Indiana University Press	5. 総ページ数 430
3. 書名 Provenance and Early Cinema	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------